

20年の思い

～ 震災20年を振り返って～

阪神・淡路大震災の教訓を、 次の世代に伝えたい！



認定NPO法人日本災害救援
ボランティアネットワーク
(NVNAD)
常務理事 寺本 弘伸

阪神・淡路大震災当時、西宮市役所に集まったボランティアが中心となり1995年2月1日に発足したのが、日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)の前身である西宮ボランティアネットワーク(NVN)です。

行政とボランティアが連携して被災者の救援活動を行い、これが西宮方式と呼ばれ、災害時に行政とボランティアが連携することがいかに大切であるかということ学びました。

あれから20年、今では災害発生時には各地の社会福祉協議会が中心となり、災害ボランティアセンターが発足し、ボランティアの受入れをする流れが構築されてきています。



【岩手県野田村の仮設住宅での支援活動】

2011年3月11日の東日本大震災では、津波災害という阪神大震災では経験したことのない新たな脅威が被災地を襲う結果となりました。このことは、我々の西宮でも無関係ではありません。南海トラフ大地震という巨大な地震が発生する可能性が高くなってきています。

最近『想定外』という言葉をよく聞きますが、決してこの言葉ですべてを片付けてしまってはいけません。阪神・淡路大震災の教訓を無駄にしないためにも、この20年間の様々な経験を無駄にしないためにも、もう一度原点に立ち返り、産・官・学・民が連携し、次なる巨大災害に対して西宮市全体が一丸となって立ち向う姿勢が今問われていると思います。

行政だけに頼るのではなく、いま一度、市民一人ひとりができることを考え、地域が協力しながら備えていきましょう。

震災を経ても変わらぬ 伝統を重んじた酒づくり



●辰馬本家酒造株式会社
取締役 壺岐 正志

阪神・淡路大震災では、伝統的な酒づくりをする季節蔵の多くが潰れ、明治27年の完成以来、数多くの銘酒を育み続けた白鹿の象徴“双子蔵”も倒壊しました。

震災当時は、白鹿記念博物館の被災した映像が流れ、白鹿が潰れたのではないかといった誤解も受けましたが、幸いにも平成5年に建てた醸造蔵の六光蔵が無事であったため、1ヶ月足らずで生産を再開する事ができました。

平成22年には、双子蔵のイメージを継承した新工場として「白鹿館」を竣工し、白鹿としての震災復興は完了しています。白鹿館は、“双子蔵”をイメージした2つの屋根や、震災の経験も踏まえ、高潮対策として建物の嵩上げや受電設備を5階にする等、災害への対応に配慮した建物となっています。

震災は、白鹿の酒づくりの大きな転機となりました。当時、お酒づくりをする杜氏の高齢化等で季節蔵での酒づくりは縮小していましたが、杜氏が続く限り、長く続けようとしていました。それが地震により、杜氏が蔵に入り込んで、冬の間、酒づくりする場所であった季節蔵が無くなってしまったのです。



【倒壊前の双子蔵の様子】



【白鹿館】
伝統を今に継承するため、震災で倒壊した双子蔵のデザインをモチーフに竣工

白鹿記念酒造博物館



震災
当時

写真奥にある「記念館」は無事でしたが、レンガ造の酒蔵館は全壊しました。酒蔵館は道路を挟んだ場所へ移り、跡地は現在、駐車場となっています。

しかし、六光蔵では伝統を残す手造り用の蔵の設備も残しており、杜氏に顧問として来てもらい、従業員に酒づくりを指導するという形態をしばらく続け、これまでの白鹿の酒づくりをしっかりと受け継いでいます。

震災により季節蔵は失いましたが、白鹿は昔ながらの伝統を重んじた酒づくりを継承しています。

シバザクラがつなく 地域のつながり



● ボランティアグループ
「ゆりの会」

仁川百合野町地すべり資料館の西側斜面にある「ゆりのガーデン」では、美しいシバザクラが咲き誇ります。この場所は、阪神・淡路大震災で大規模な地すべりがあり、34人の尊い命が失われた場所です。

ボランティアグループ「ゆりの会」では、震災を風化させないため、また、地域でのつながりづくりのために、シバザクラを大切に育てています。もともとは、地域の資源ごみの回収グループでしたが、震災で家が潰れ、雑草だらけとなった空き地を見かねて、草を抜き、花を植えるという取組みがきっかけで活動の輪が広がりました。

地域の中でもこの場所で何があったのか知らない人が増えてきていますが、何らかの形で引き継いでいく必要があると感じていま

す。会員の高齢化により、広い斜面の手入れは大変ですが、このような活動を通じて人との関わり合いが出来る場所は他には無いという思いで活動を続けています。

また、地域で花のカレンダーを配布するなど、会の活動を少しでも知ってもらおう工夫をしながら皆さんに参加・協力をお願いしています。



【ゆりのガーデン】
シバザクラ以外にも四季折々の花を育てています

毎年4月頃はシバザクラを見るために大勢の人が訪れます。その際は、震災による被害があった場所ということを改めて知って頂く機会にもなっています。これからも活動を続け、シバザクラを通じ、人と人の「絆」が生まれる大切なこの場所を次の世代へつなげていきます。

仁川百合野町地すべり現場



震災当時 震災で発生した土砂災害のうち、最も大きな被害が出た場所です。震災後、跡地の斜面は整備され、現在は兵庫県の地すべり資料館が建っています。

身近で頼れるラジオ局を 目指して



●西宮コミュニティ放送株式会社
(愛称・さくらFM)
代表取締役社長 北村 英夫

あの日は妻の「お父さん、地震!」の叫び声で目が覚めました。いやあ凄かった!揺れが収まり家族の無事を確認後、市職員だった私は直ちに市役所へ。当時、西宮北口の再開発に携わっていたことから、北口駅周辺での遺体収容や瓦礫撤去にあたりました。救助活動では自衛隊の活動を目の当たりにし、その存在とすごさを実感したものです。

震災を契機に北口の再開発は一気に進み、住民説明会や権利者交渉等々を経て、現在のACTA西宮の起工式に至る3年間の仕事は超濃密でした。今、震災を振り返って思うことは、市職員は、平素から常に、そしていざという時はより一層市民のためにベストを尽くした仕事をして欲しいということです。

私が今、働いているさくらFMは、震災を契機に設立されたコミュニティFM局です。市民の身近なラジオ局として、災害が発生した時の情報発信はもちろん、災害後に必要となる生活復旧の情報についても、きめ細やかな発信をすることができます。

災害は私たちの予測を遥かに上回る規模で突然襲ってきますが取り組み次第で被害をできるだけ少なくすることは可能です。その際、ラジオは優れた情報伝達の手段となります。緊急時にラジオが情報手段の一つとして役立つためにも、普段から魅力ある番組を提供し、皆さんに聴いて頂くことが大切だと考えています。

さくらFMが平素から市民に親しまれ、いざっ!という時には頼られる存在になれるよう奮闘中です。

西宮市デジタルライブラリー

「阪神・淡路大震災 ～ 震災の記憶 あの日を忘れないために ～」



当時の記憶と教訓を忘れることなく、後世へ伝えていくために、西宮市が所蔵する各種の記録、資料等をウェブサイト上で公開しています。

この冊子に掲載した写真の他にも数多くの写真を見て頂くことができます。

※西宮市のホームページ
(市政情報→市のプロフィール→阪神淡路大震災関連情報)